V I E W

慰安婦問題の問いかけているもの

天児　都

天児　都 / あまこ・くに
産婦人科医。1935年博多で麻生徹男二女として生まれる。1959年九州大学医学部卒業。同大学院医学研究科修了。1967年より福岡市内の診療所に勤務し現在に至る。1983年～93年九州大学医療技術短期大学部非常勤講師。1990年より福岡女学院理事。1991年細胞診指導医（1102号）、1996年より福岡市医師会学術担当理事。日本母性保護産婦人科医会福岡県支部代議員。福岡市YMCA常任議員。1997年より日本産科婦人科学会福岡地方部会評議員。日本歌人クラブ会員。
慰安婦に関係のあるものとして、
1993年 父麻生徹男の回想録『上海より上海へ』（石風社）出版
1995年12月号『正論』従軍慰安婦と私
1997年7・8月号『現代コリア』慰安婦問題の問いかけたもの
――私自身の問題として――
1998年6月発行「九州大学医学部産婦人科学教室同窓会誌第40号（平成9年度）」引揚者の中の強姦妊婦及び性病感染者の保護について

元予備役陸軍々医大尉、故麻生徹男氏を父にもち、その父親の著書『上海より上海へ』をめぐり、好むと好まざるとにかかわらず「従軍慰安婦問題」と大きくかかわる運命にあった産婦人科医天児都氏が、その体験を綴った手記を寄せてくださった。

＊　＊　＊

――はじめに――

私はこの10年ほど慰安婦問題とかかわり、どなたとも違った経験をしてきました。それは千田夏光という作家に、父が慰安婦制度を考案した責任者のようにほのめかされ嘘を書かれたため、平成3（'91）年頃から、民族の恨みを晴らすためとか責任者の娘としてどう思うかなどと様々な人が連絡してきて、ある時は押しかけて来て、それらと対応してきたことです。千田氏はこの著述が誤りであり、今後誤解をまねく記述はしないと平成8（'96）年4月15日消印の手紙で謝ってきましたので、三一書房と講談社に改訂を申し入れましたが、2社とも現在もそのままで出版を続けています。私は、慰安婦問題は千田夏光の誤りを何ら検証せず、事実として平成3,4年頃出版した人たちが誤りを再生産して日本中に広め、それが海外へ流出して不幸な日本叩きの材料とされた事件だと思っています。

――慰安婦とのかかわり――

平成元（'89）年7月11日に亡くなった父、麻生徹男が昭和12（'37）年から16（'41）年にかけて日本軍の軍医として中国戦線にあり、この間に慰安婦と慰安所の写真資料10点と慰安婦に関する論文一篇の第一級資料を残しました。

この資料は昭和12（'37）年12月の南京陥落前後の日本軍の行動が国際問題となってきたので、婦女暴行の対策に主に北九州地区で支度金1000円を払って急據集められ上海へ行った女性たちと、日本軍が昭和13（'38）年2月に上海に開設した軍直営と民営の慰安所の両方の写真です。

父の死の直後に、強制連行のことを調べているという作家が、母の所から父の資料を持ち出して返却しなかったので、法的手段をとってそれらが使えぬようにしてそれ以来私が父の資料の管理者となりました。

慰安婦のことについては父が昭和32（'57）年博多の情報誌『うわさ』に述べ、昭和52（'77）年毎日新聞の「不許可写真集」に写真5点を掲載していました。父は昭和61（'86）年に慰安婦資料すべてを入れた『戦線女人考など』という本を作り、次に同名の写真集を作る途中で亡くなったので、私はそれを仕上げて100部作り知人らに配りました。この２つの本を合わせて平成５（'93）年8月に『上海より上海へ』を石風社から出版して慰安婦の事実を知って頂くよう努めてまいりました。

最初に慰安婦問題が取りあげられたのは昭和40年代後半から50年代前半の頃です。作家の伊藤桂一や千田夏光の本の出版、テレビ放映、映画制作があり、千田氏の本は当時ベストセラーとなり、今に続くロングセラーです。次は湾岸戦争をきっかけとして、平成3（'91）年に韓国人らが強制連行の補償を求めて提訴した頃から現在に及んでいます。

父の生前に私が慰安婦にかかわったことは2度あり、最初は昭和20（'45）年10歳の時にはじめて写真を見た時で、2度目は昭和61（'86）年に父の資料をもとに話をした時でした。それから父の死の直後のことになります。平成元（'89）年10月にルポライターが母の所から父の資料を持ち出したのと同じ頃に、東京の不二出版の「十五年戦争重要文献シリーズ」第一巻『軍医官の戦場報告意見集』に写真10点と手書き論文一篇を入れ、戦争の資料として後世の人に公平に見てもらうことにしました。

平成3（'91）年頃から雑誌やテレビの取材が多くなり、11月28日NHKテレビの「ニュース21」において父の撮影した写真4点が放映されました。平成4（'92）年1月16日に宮沢首相は訪韓の折に韓国に謝罪しました。その前後に私の家の電話は鳴り続け、落ち着いたら12時近いこともあり、日本中の主だった雑誌社、テレビ局、新聞社、政党などから連絡を受けました。この時不思議なことに「これが日本が残した戦後処理の最後のものである。政府に謝罪を要求して一日も早く補償しなければならない」と言う科白を繰り返し聞かされました。昭和40（'65）年に日韓条約を締結し5億ドルの賠償を払っているので「もう税金からは無理と思いますが、あなたは自分のポケットマネーから支払いますか」とある時からそれらの人たちに聞いてみました。自分のポケットから出すと言ったのは唯一人で他の人たちはすべて政府が出すべきだ、湾岸戦争にあんなに多額の支出をするじゃないかという答えでした。

慰安婦の性病管理をしなければ多くの人が病気になり、管理をすれば慰安婦の人権問題となるという難しい問題を一面のみから見て議論されているのを聞きます。

今言われている慰安婦問題は、国内での問題をわざわざ対外国の問題にして口火が切られています。多くの人々には忘れられていますが、日本は1853年ペリー来航から治外法権撤廃までの50年間ヨーロッパ諸国の半植民地でその間外国人の慰安婦にされ、昭和20（'45）年の第二次大戦後、国が再び弱体化した時にまた国内で外国人の慰安婦にされました。また中国や朝鮮半島での強姦による妊婦約800人を引揚港で保護して更正させたこともあります。外国との関係で言えば日本人はこうした屈辱を受け、戦争犯罪人と言われ1100人もの人が殺され、それらに耐えて独立を回復してきたのです。

――千田夏光著『従軍慰安婦』正・続篇の誤り――

昭和48（'73）年出版の＜正篇＞には63ヶ所＜続篇＞には23ヶ所問題のある記述があります。この本の取材記事では具体的に慰安婦が商行為であることが述べられているのですが、論文で

故麻生徹男氏

の考察に当たる部分に事実の裏づけがなく矛盾が多くみられます。現在ならノンフィクションのジャンルにはとても入れられないものを、最近の作家たちが事実を検証せずにマゴ引きをして誤りを拡大してしまいました。

問題点をあげてみます。

（1）従軍と慰安婦を結んで造語をしたこと――従軍看護婦など軍属の身分を表す用語と並べて「従軍慰安婦」という造語にしたため、従軍には強制の意味が含まれるので、これが容易に強制連行に結びつき、強制連行が性的奴隷を想像させ、現在の混乱のもととなっています。

（2）根拠なしに強制連行と結びつけたこと――支度金1000円を払って連れて来たという文中に強制連行されたと書く矛盾があります。

（3）娼婦連れで戦った唯一の軍隊として品位を落としたこと――植民地に軍隊を出したヨーロッパ各国やアメリカにも慰安婦はいました。麻生論文の中にそれらの慰安所管理のデータが含まれています。

（4）麻生軍医が朝鮮人慰安婦強制連行の責任者のようにほのめかして書いたこと――韓国から責任者の処罰などの要求が政府に届いた頃に私は多くの人たちから謝罪しろと言われ叩かれました。父は産婦人科医だったので慰安婦の検診に呼び出され、昭和13（'38）年1月2日にそれを行い、1年半後の昭和14（'39）年6月30日の軍医会同という軍医の会で講演をして論文を残しています。その中に80名の朝鮮人と20名の邦人を診た記述があるのですが、その論文のために朝鮮人が強制連行されるようになったと千田氏は言っているのです。

（5）麻生の論文は娼楼でない軍用娯楽所設立を希望しているのに、千田氏は娼婦は不可欠のものとして読み違えられたこと。

千田氏は著書を基に韓国に英語版『慰安婦』のビデオを制作させ世界に流布させています。日本の輸入業者が高校社会科の副教材に輸入をするところでしたが、私が止めました。

――ジョージ・ヒックス著『慰安婦』の誤り――

平成7（'95）年10月にヒックス著の日本語版が三一書房より出版され、その中には父のことを述べた部分は少ないのですが、2月出版のオーストラリア版と8月出版のアメリカ版には7ヶ所ドクター・アソウの名が出てきます。ヒックスは日本語はできないと言い、この本はゴーストライターの韓国人Hye Kyung Leeが書いたと言いますが、私はこの人の取材を受けたことはありません。文献が沢山並んでいて索引もついて立派な学術書のようですが、文献は千田夏光の本とそれをマゴ引きした著書のものばかりです。

7ヶ所のうち8ページには「おそらく後の最も健康な慰安婦供給源への基礎をおくのに手助けした」として父を紹介し、138ページには「上海の慰安所の主唱者」とまで書かれています。

またオーストラリア版、アメリカ版と日本版に父の写真が無断使用されていて、英語版では版権者がDong-A-Daily（東亜日報という韓国新聞）となっていたので、手紙を送って返事を待っている時に国連人権委員会でクマラスワミ報告がtake noteとなったニュースを聞いて驚きました。クマラスワミ報告の事実関係の供述はヒックス著書によるものと知ったからです。無断写真使用には著者と出版社に国際弁護士事務所を通じて再度手紙を送りましたが返事をよこさないので催促してもらうように弁護士に頼みましたが、これ以上すると裁判になり慰安婦問題に立ち入り、日弁連はあなたと立場が違うから弁護できないと言われました。東亜日報に抗議した分は東京支社長の襄仁俊（イヘンジュン）氏が電話で謝罪してきました。

――宮沢首相と河野官房長官の謝罪と強制連行を認める発言の訂正――

平成4（'92）年1月宮沢首相は訪韓の折にソウルの日本大使館にデモ攻撃をかけられ慰安婦問題で韓国に謝罪をしてしまいました。平成5（'93）年8月4日の河野官房長官の発表の調査資料には強制連行を思わせる証拠らしいものは含まれていません。

平成9（'97）年1月31日片山虎之助議員の質問に平林博外政審議室長が「政府が調査した限りの文章の中には軍や官憲による慰安婦の強制募集を直接示すような記述は見出せませんでした。たゞ総合的に判断した結果一定の強制性があるということで、先ほどのご指摘のような官房長官の談話の表現になった」と答え、3月12日小山幸雄議員が詳細な質問を行い発表前後のことが明らかにされました。

しかしその後も大手出版社が相変わらず強制連行の中の慰安婦記事に私の写真協力を求めてきたのでお断りしました。

日本は戦争中に労働力確保のために徴用を行っていましたが、その中の朝鮮人だけを取り出して強制連行という言葉でくくることが妥当なことであるか検討してみる必要があります。

――私自身の問題として――

私がこの10年間やってきたことを述べます。

（1）資料使用のための条件を守ってもらうこと。

1）歴史資料である。性的興味をそそるような使用はしない。

2）民族間の紛争をあおるような使用はしない。

3）テレビや雑誌などの発表に適さないものは使わない。

資料使用にこの3つを主張してきました。

（2）文書館や資料館を作って、誤った世論操作をさせない。資料を盗む者がいたので、公表の徹底をはかるよう努めてきました。

（3）歴史の問題を世界に通ずる言葉で語ること。

1）慰安婦のことは日本の約百年の売春の歴史との関連で見てゆくことです。

2）自分の国を語るとき、世界の植民地政策の歴史を軸にして、明治維新以降を自国の外交史の立場で話しています。どの国の人もそうなので、すぐに理解されます。イデオロギーの付いた学問は初めに結論があってそれに都合のいいように資料はつまみ食いされ曲げて使われます。事実を積み上げて結論に導く科学的方法をとるべきです。

私の個人的努力も限界に来たと思われることが起こりました。それはこれほど問題のあることを中学校の教科書に載せたことです。ヨーロッパ諸国、アメリカにも慰安婦はいたのに何故日本だけがこんなバランスを欠く教科書を作ったのでしょうか。改めてゆくべきです。

国連の周辺で慰安婦をsex slave、慰安所をrape centerなどとする訳語が出るようになり、本当のレイプと慰安婦を区別する必要があり調査をしました。レイプの20%が妊娠にいたると

ドイツの統計は語っていますので、少なくとも推計4000人が戦後日本への引揚げの途中でレイプの被害を受けたことになります。これらの人たちは日本のこうした混乱を悲痛な思いで見守られていることと思います。

――おわりに――

私たちは慰安婦問題を正してゆくことが必要です。そのためにはまず自分の国の歴史を正しく知ることです。アメリカや中国の人の目で日本を見て自国を貶めている人たちが多くいるのは驚きでした。こどもたちの歴史の教科書は極東裁判のアメリカのマインドコントロールのもとにあり、私たちは自分たちの手で子や孫に本当のことを伝えてゆく必要があります。アメリカのヘレン・ミアーズは1948年に『アメリカの鏡・日本』（メディアファクトリー刊1995）を書きマッカーサーに発禁にされましたが、戦後50年間に日本に欠けていたのはこのような人ではないでしょうか。政治の道具にされず、深い洞察力をもつ学問の基礎が日本に築かれることを願っています。

慰安婦問題を利用してきた人たちが沢山います。国内ではどんな人たちかもうおわかりでしょう。国外では日本叩きをする人たちです。平成9（'97）年アメリカで中国系アメリカ人アイリス・チャンが『レイプ・オブ・南京』を出版し話題となりました。このように日本の歴史に対する間違ったことが世界中に流布している現状です。日本人自身が自ら歴史を知らず、こうした中傷に迎合する人たちがいますが、誤った中傷や非難に自身で反論できるぐらいの人がもっともっと欲しいと思います。

今、歴史学と文学との混同があります。慰安婦問題は性の攻撃性と自虐性のどちらも多く含んでいるので文学のいいテーマでしょう。歴史がきちんと学ばれていないところでは、嘘がとめどなく広がってゆきます。平成11（'99）年3月アカデミー賞短篇ドキュメンタリー賞が伊比さんという若い日本人女性に与えられ嬉しいニュースでしたが、彼女は「従軍慰安婦」をテーマに映画を撮りたいそうです。若い人たちに歴史の事実を知らせる努力を続けねばならないと思っています。私たちの尊厳を守るために。

（'99.4.15）

＊　＊　＊

弊社と天児都先生のご縁を知っていただく上で、先生の義理の父上であられる故天児民和先生が、東機貿20年史（1974年刊）にお寄せくださった手記が役立つと考え、ここに転載させていただくことにした。

東機貿創立20周年に当りて

(1974年刊『東機貿20年史』より)

九州大学名誉教授
九州労災病院院長　天児　民和

東機貿が、20周年を迎えられるときいて年の流れの速さを感じるが、しかし20年という年月も、特に敗戦の直後にはじまっているだけに感慨深いものがある。

佐多保之社長（注：現社長保彦の父）とは考えてみると随分長いおつきあいである。佐多さんのお父さんと私の父との交友から数えて行くと、もう80年に近い関係である。私の父は、阪大の前身大阪医学校と言われた時分の卒業生である。そして、長らく神戸に住んでいた関係上佐多さんと大変親交が厚かった。そんな関係で、私の長兄の結婚の仲人もしていただいたし、私の結婚式にも出席して祝辞をいただいた。

当時は、大阪大学の学長をお勤めになり、名実ともに今日の大阪大学の基礎をおつくりになった。元来病理のご出身で、若い頃九州大学の開設当時、即ち明治36年講師として、九大の第1回から3回生までの講義を受けもっておられた。その当時九大病院の前は、千代の松原で大きな松の林でキツネが出たという話を直接承ったこともある。大阪では結核の研究を進められ、阪大に肺癆科を創設せられた方で、現在の山村内科はそのあとを継いでいる筈である。現在、阪大医学部の前に大きな胸像が立っている。その前を通るたびに、佐多社長がお父さんにだんだん似てこられるように思われる。お父さんは学者としても一流であったし、学長としても第一級の学長であった。その性格、その能力をそのまま受け継いでいるのが、佐多社長ではないかと思う。

私と社長との出会いは戦争中である。昭和14年には、私は応召になり大阪堺市の金岡陸軍病院に勤務した。私は、35歳でもう頭が大分禿げていたが見習士官で召集になった。その当時、金岡の陸軍病院に溌剌とした軍医少尉がいた。それが佐多さんであった。あちらは少尉で、こちらは見習士官、階級がものいう軍隊では何かとお世話になったが、昭和16年社長は外地に出てしまわれたが、私は東京の第1陸軍病院に転任になった。それから暫くお逢いすることもなかったが、戦後、東京に出てきて商売を始めるという話を聞いて驚いたり感心したりした。

終戦当時、私は、新潟医科大学にいたが、昭和25年九大に帰ってきた。その頃から日本にも本格的な麻酔が始まり、麻酔の勉強に多くの人が米国に留学した。それらの留学生の情報では、米国のフォレガー社の麻酔器が一番よいという話であったが、その輸入を一手に東機貿がひきうけることになった。これがそもそも成功の第1歩である。これには、義兄の三宅教授と古川教授お二人の援助も大きな力になったと思う。元来社長は、戦争中でも最高級の長靴をはいていたし、いつも着るもの、食べるもの何でも第一級品を選んだ。われわれ貧乏人にはちょっと驚異であったが、その性格が商売の面にもよく現れている。東機貿の品物は高いがすべて世界の第一級品である。安物は扱わない。もちろん高いので買う時には少々ためらうが、買って後悔することはない。これが佐多商法の成功の秘訣であろうかと思う。安物買いの銭失いという言葉がある。東機貿の品物は高いが安心して買える品物であるといつも私は感じている。ただ、私の病院の予算がいつも削られているので、折々買いたくても買えないことがあるが、そんな場合は涎を流しているわけである。

最初商売を始められた頃には細菌学者で医学博士では武士の商法というようなことにならないかと、多少の心配をしながら眺めていたが、なかなかどうしていつの間にか医療機械の輸入商としては第一流になってしまわれた。これは何ごとも、最良品を求めようとする高い理想と、そのために得た信用の結果であろう。恐らくは今後も益々発展せられるであろうが、長い間続けてこられた最高の品という態度を、崩されないようお願いしたいものである。